
喧嘩するほど仲がいい・・・？

咲亜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

喧嘩するほど仲がいい・・・？

【Nコード】

N8004N

【作者名】

咲亜

【あらすじ】

坂本と銀時が大喧嘩！

何故か激昂している二人。

だが、その喧嘩の終戦間際、坂本がある失言を・・・。

(前書き)

星さんへ！

すみません、短編で・・・。

最初ギャグ傾向、後シリアスです。

ご了承を！

では、どうぞ！

喧嘩するほど仲がいい。

そんなの本当にあるのかな・・・？

「銀ちゃん、ただいまヨー」

「ただいま帰りましたー」

しーん・・・。

おかしい。

何時もならけだるそうな歩きで此処まできて、「おー、おかえり」
くらいは言うのだが・・・。

しかもよく耳を澄ますと、何やら言い争いをしている、よつな声が
聞こえる。

誰か来ているのか、玄関の靴を見る。

「・・・あ」

そこには高い下駄。来客は坂本辰馬だ。（しかしながら、並んで女
物の草履が意味不明だ）

そろりそろりと奥に向かうと、やっぱりというか何とというか、銀時
と坂本が、喧嘩の真っ最中だった。

新八は横で楽しそうにそれを見る美代に事情を聞いた所……。

最初は真面目な話だったそうだ。

また、と言つては何だが、高杉が何かやらかしたので、万事屋で、後に来る桂と共に話し合い的な事をするつもり、

だった。

しかし、何を話してもそっけない態度の銀時に、坂本がいらついで、とまあこんな感じらしい。

「大体おまんはいつも腑抜けた顔しちよるき！わしも話す気い無くすきに！！」

「あん？テメーに言われたかあねえんだよ！！バカ本！！」

もうすでにヒートアップの二人。

この前にいったい何があつたんだ……？

「バカ本言つたかおんし！！それゆつたらおまんだつてそうじゃろ糖分狂い！！」

「誰が糖分狂いだこの阿保イントネーション！！」

ああ……、愚かな争い（というか喧嘩？）だ……。

ため息をつく新八に、美代が小さく言う。

「珍しいのよあの二人が喧嘩なんて。隊長となら嫌というくらい分

かるけど・・・」

そんな事を言いながらも、止める気なんてさらさらないうつ、目の前の喧騒に顔を戻す。

今にも斬り合いの喧嘩になりそうな雰囲気の中、玄関を開けて入って来たのは、ツラこと桂だ。

「何だ、この喧騒は」

「もっさんと白夜又が喧嘩よ」

「ほう、珍しい事もあるものだ」

いや、感心する前に止めてください。

「大体お前昔からそーだよな！！ちよつと自分が失敗すりゃあ笑ってるクセして、人の失敗はねちねちですか！？姑かオイ」

「笑った覚えはあるが、ねちねち言った覚えなんぞ無いき！！おんしの記憶器官は異常かや？！」

「オメーの感覚器官こそ平気か、ああ！？」

いやだから、何で今の流れから昔の話に！？

もはやツッコミ所の無い喧嘩を前に、桂も美代も、今はただ呆然と見るまでだ。

「ほんじゃ何かの。わしは頭いかれとるちゅーんかや？」

「ああそつだよ。精神科行って来い」

多少静かになったのはうれしいが、殺気と威圧感はさっき以上に増している。

さしずめ、恐い。

すでに新八、神楽、他攘夷組は他の部屋の襖から覗く始末。だっておっかなくてしょうがない。

「まったくのお、こんな男に育てた、親の顔が見てみたいもんじゃ」

あ、

桂と美代の表情が固まる。

直後、パンツ、と乾いた音が静かな部屋に響いた。

薄い色のサングラスがからんと落ち、綺麗にひびがはいる。

「……最低だよ、お前」

そう言い放ち、玄関から音も立てず出て行った。

「……あーあ、こりゃ失言だわな。もっさん、アンタ、白夜叉に親なんていない。親代わりも死んだ事は知ってるわよね？」

「まあ、簡単では無いだろうが、一応謝って来い」

「……わしゃ、銀時に何て事……」

「もっさんや、うじうじしてる暇あんなら早く追いかけなよ。ね？」

終わるが否や、風の如く飛び出す坂本。

「……てゆうーかさ、辰馬と白夜叉があんな喧嘩するなんて思わなかった」

「俺もだ。先が気になるが、着いてくか？」

「そーねえ。私も気になるし。新八、神楽、アンタ達も行くのよ」
「え？あ、はい！」

静かに流れる川を眺めている銀時が、河原に小さくなって座っていた。

その赤い瞳には、涙が溜まって、今にも零れそつだ。

「……銀時っ！」

始め、彼の言葉に身動きもしなかったが、やがて囁くように言った。

「……俺には、親なんていない。だから、俺はずっと一人で……でも、あの人が孤独から救ってくれた、あの人が俺の親だった。でもね……」

涙声のため息を一つついて、銀時は続けた。

「死んだんだ。真っ赤な血みたいな紅葉を、それ以上に真っ赤に染める炎が、俺の目に焼き付いてんだよ……」

坂本は、攘夷戦争が終わってから、彼の弱い所を見た事がなかった。

静かに歩み寄って、横に座る。

「……銀時、わしゃあ、おまんに酷い事を言っしもつた。……わしを、許してくれんかの？」

「……やだ」

その一言で、坂本の表情が消える。

しかし銀時は、逆に笑って言った。

「けど、パフェ奢ってくれたらいいよ」

「・・・まったく、銀時は甘味好きじゃのお」

「オメーに言われたくねーよ、酒好き」

楽しそうに笑う二人を、遠目から見ていた桂、美代、そして新八と神楽は、ほっと安堵の息を漏らす。

「やっぱあの二人はああじゃないと、不自然そのものですね」

「確かに。私達もパフェ食いに行こうヨ」

「そーね。じゃ、皆でいきますか!」

「俺は蕎麦で十分だ」

桂の冷めた言葉を軽やかに無視し、神楽が二人を呼び止めた。

喧嘩するほど仲がいい。

確かにそうだった。

・・・そういえば・・・。

「高杉さんの件は？」

「（ギクッ）……こっちから上手く話つけどくわ……」

頑張れ、鬼兵隊No.2……。

(後書き)

土佐弁ってナニ？おいしいの？

土佐弁不明。私に誰か翻訳機を・・・。

最初はギャグ路線だったのですが、

ぴかーん！

的な感じでシリアスになりました。すみません、眠くてハイ&阿保になってるだけです。

では、感想、評価よろしくおねがいします！

あ、短編ならいくらでもリクエストうけますよ！！

でわでわホントにさよーならー

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8004n/>

喧嘩するほど仲がいい・・・？

2010年10月11日00時08分発行